Bulletin of Aichi Univ. of Education, 61（Educational Sciences）, pp. 89 − 95, March, 2012

教育における「時間-空間-人間関係」問題に関する研究（1）
―ベルクソンの時間論を手がかりに―

玉木 博章* 藤井 啓之**

*卒業生
**学校教育講座（教育学）

A Study on Relationship between Time, Space and Human-relation in Education (1): Through Analyzing the Time Theory of H. Bergson

Hiroaki TAMAKI* and Hiroyuki FUJII**

*Graduate, Aichi University of Education
**Department of School Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

Ⅰ 問題の所在と理論的仮説

教育において子ども・若者の時間意識はどのように位置づけられているのだろうか。音楽や運動におけるリズム、スポーツにおける計時など、ごく短い時間を問題にすることもある。45分、50分という一時間の授業という時間もある。学校には日課表として学校にいる時間の流れを示したものがあるし、最近流行りの「早寝早起き朝ご飯」というスローガンに代表されるような一日の時間サイクルを取り扱う生活リズムの問題もある。また、時間割は一週間の時間の流れを示しており、学期という区切りもある。温帯である日本の四季やそれにともなう長期休暇や学校行事、そして年度という考え方などは一年という時間を意識させるものとなっている。修学旅行等の学年行事や受験なども含めて、6・3・3・4制という学校段階も時間意識に影響を及ぼす。キャリア教育などでは一生（多くの場合、就職するまでしか射程にないが）というスパンでの時間意識を重視しているし、歴史学習では、一人の人間の一生を超えた時間を扱っている。このように学校教育においては、意図的・無意図的にさまざまな時間に関する意識を形成しているし、その場と機会がある。

他方、これらの時間意識の形成とは対照的に、「近頃の子ども・若者は『いま・ここ』さえ良ければよいという傾向が見られる」とか、「近頃子ども・若者は、将来のためにいまを我慢することができない」とかいう言葉をよく耳にする。そして、これらの傾向が、ネオ・リアリズムなどと名付けられもしている[1]。また、最近の子ども･若者の傾向でつとに語られる、「空気を読む」とか、「キャラ化する」とかいうことも、その場をうまく／なんとか遣り過ごすという意味では、「いま・ここ」を重視することと関連しているように見える。さらには、たとえば狭い通路を塞いで友人との会話に熱中し、通行人がいても気にすることなく、周囲のことに気を遣わないなどという傾向も指摘される。

いずれにしても、「いま･ここ」の状況（楽しさ、人間関係）を重視するということは、若者の時間意識が刹那的になり、人間関係も含めた空間（拡がり）意識が狭くなったということを意味するだろう。このような子ども・若者の現状はいったいどこから生じてきているのだろうか。そして、学校における時間意識の形成は、これらにどのように対応可能なのだろうか。「子どもの『わがまま』を許さない」という強硬論や、将来のために今をどう過ごすのかという視点から「夢を持たせなければならない」と強調されるキャリア教育や、キャラ化に抗して「本音を出すべきだ」といった言説は有効な対応となるのだろうか。あるいは他方で、現在の子どもたちは、それほど身近なことに神経をすり減らしているのだという擁護論[2]もあるが、そこから時間意識を育てる契機は見いだせるのだろうか。

本来ならば、子ども・若者が刹那的になったという前提の把握が正しいのかどうかという根本的問いを立てる必要があるのだが、今回は一般的な指摘に従うこととして、次のような諸点について考察したい。

① 者が刹那的になった背景について理論的にどのように分析されているのか。
② そもそも刹那的とはどういう状態なのか。
③ キャラを演じるということはどういうことか。それは悪いことなのか。
④ 若者の刹那主義とキャラを演じることは関連があ

るのか。

⑤ 若者の刹那主義と将来展望には関連があるのか。

⑥ 若者の刹那主義への教育的対応のさまざまな主張は適切なのか。

本論では、まず①について概略を示す。そのうえで、②や③について、H. ベルクソンの『時間と自由』を手がかりにして検討する。それを踏まえて、③～⑥を考察するなかで、ベルクソンの理論枠組みの有効性と問題点を明らかにしていく。

しかし、そのまえに、若者の時間意識に関して、大まかな理論仮説を明らかにしておきたい。それは、「人間にとって時間と空間と人間関係が密接に関連している」のではないかということである。ここで言う時間、空間、人間関係は、客観的な時間・空間・人間関係のことでもあるし、同時にまた、時間意識、空間意識、人間関係意識のことでもある。

刹那的であるということは、時間が細切れになるということを意味する。場所（空間）によってキャラが変わるというのは、場所ごとに時間が分割されているということを意味するだろう。とすれば、キャラを立てるということは、刹那的であることと関連するように思われる。また、眼前の人に集中して周囲が見えないということは、眼前の人―その背後にある人―それらをとりまく広い人間関係という尺度でいえば、意識のリーチが短いということがいえよう。ここで人間関係は、たとえば生産―消費の関係で言えば、生産する―流通する―消費するという時間軸に従ってつながっているのだから、人間関係のリーチが短いということは、時間のリーチも短いということがいえるのではかろうか。このことは、「どのような多様な空間･場所で生きているか、どのような人間関係を生きているか」ということが、その人の時間意識に影響を及ぼすのではないかということを予想させる。ここから、たとえば、物理的空間もサイバースペースも含めた活動場面の数や、電子メールやTwitterでの身近な人とのやりとりするときの相手の人数ややりとりの数と、時間的展望のリーチの相関関係を調査するという課題も生まれてくるだろう。これらの仮説を念頭に置きながら、以下考察をすすめていく。（藤井啓之）

Ⅱ　反射的・刹那的行動のメカニズム

まず、現代における刹那主義がどのように論じられているのだろうか。反射的行動や刹那的行動は、何も子ども達や若者に限定した特徴ではないと言われる。むしろこれは現代社会全体に現れている特徴である。年配世代は、反射性・刹那性があまり要請されない時代も経験しているから影響が緩慢なだけであり、反射的・刹那的行動が要請される時代に生まれ育った若年層に顕著に現れているだけである。

そもそもこのような様相を引き起こしている原因は、もっとマクロな部分にある。根本的な原因は、近代化の過程で社会問題が個人のレベルに帰されたことで生じた「個人化」であると考えられるだろう[3]。それら諸説の中でも社会学者U.ベックは個人化のことを工業社会的生き方の脱埋め込みをした後に、新たな生き方による工業社会的生き方の再埋め込みを意味するものだとしている[4]。この新たな生き方においては、一人ひとりが自らの生活歴を自分で創作し、補修していかなければならない。つまり個人化とはありとあらゆるものを宗教などの権威的な風習と切り離し、個人を独立させるものなのだ。そしてこの個人化のプロセスこそが「近代化」[5]であり、「脱埋め込み」である。しかしながらそのように脱埋め込み化すると、全てを自らの選択で決定し、人生を過ごしていかなければならなくなり、選択や意味づけである再埋め込みは個人の責任問題となる。それは自由である反面、非常に不安がつきまとうものである。この再埋め込みへの苦悩は近代全般に起こっている生きづらさの問題の一種だと言える。だが、誰もが不安定で生きづらい状態でいることは望まないだろう。個人化した社会では、自らを意味づけられる者とそうでない者が明確に分かれる。

例えば、自分の将来の目標やビジョンなどが明確に見えていたり、自分が存在する理由に明確な自信を持っていたりする者はまだ意味づけができるから良い。だがそれが出来ていない者はもちろん、出来ている者だとしてもそれがまだまだ不安定な者は自分の生活に意味を持たせることが非常に難しい。そうなると自己肯定感は低くなる。そこで多くの若者や子どもは自己存在の安定を人間関係に見出そうとしたのだ[6]。それはまさに他者から承認などの人間関係において、自らを再埋め込みするのである。安定を得るために周囲の求めに応じるのだ。自己選択によって自己を成り立たせなければならない子どもや若者達にとって、確固たる自分の生き方が決まっていない段階では、人間関係から得られる意味づけはかなりの効力がある。だからこそ、彼らは学校や他のコミュニティでも人間関係にコミットしてしまう。そしてその結果、自分を意味づけるという目的のため眼前の人間関係に対応することに必死になり、選択自体の膨大さや即時の反応を求められる故に、それらの是非を問う感覚さえも麻痺していく。それは結果的に自らを追い込むことにもなっている。

実際にこのような即時的行動の状況をS.ラッシュはU. ベックが「反射」（reflex）と述べたことを引き合いに出して、それは「省察」（reflection）ではなく、即時性があり、不確実なものであり、何も内側に組み込まないものだと述べている。さらにそのように一瞬で速やかに決断しなければならない状況は、例えば自らが選択した生き方などによって特徴付けられる第一近

代[7]とは異なり、第二近代つまり現代に特有のものであり、物語形式の伝記を構築するための十分な省察行程が無い様子をも指摘している[8]。つまり再埋め込みのための選択は、現代では即時に行われ、不確定であり、その判断に十分な時間をかけることができないのである。そのような状況で再埋め込みを強いられている子ども達は反射的に行動しつつも、その即時性や不確実さゆえにいつかは疲弊してしまう。

特に前述した「キャラ」を使ったコミュニケーションは、他者承認のために用いられるものであると言える。しかしながらそれは先ほど述べたように不確実であり、即時性を求められるため、非常に苦しく窮屈なものである。周囲からの見えない圧力によって、本意ではないことをせざるをえないこともあるだろう[9]。

だが前述したように、そうすることで自らの存在を見いだし、ベックらが述べている個人化社会での意味づけを行っている以上、それをやめる訳にはいかないのであるが、実際にはどれだけ他者からの承認を得たところで、不確実なこの状態は意味づけの目的である安定を得ることからは実際には程遠い。承認欲求のために生まれたキャラを用いたコミュニケーションは本来あるべき姿ではないし、この方法で全員が承認を得ることなど考えづらい。クラス内でのポジションはイス取りゲームなのであるから、承認を得られる量に個人差が必ず生じる。それだからこそいっそう必死になり、場当たり的であろうとも、瞬時に反応し、承認を得ようとする。その過剰な必死さが基となり、現在にしか焦点を合わせられなくなり、子ども達は一部の識者が指摘するように刹那的だと呼ばれるのだろう。

このような現状を踏まえて、ラッシュは第二近代の自己も実際はこのような状況を望んでおらず、本当ならば反射せずに省察したいのではないかと述べると同時に、その省察するための時間や空間が存在しないことを嘆いている[10]。つまりラッシュの言葉を裏返せば、時間や場所があれば反射せずに省察することを意味している。

だが果たして、省察する時間や空間が十分に与えられるのならば本当にキャラなどの反射行動は一律にやむのであろうか。確かにラッシュに基づけば、選択の膨大さから省察時間を減少させ、反射行動を生み出した。そして選択ゆえの不安定さに駆られて他者承認を求めたために、より一層反射行動に勤しんでいる。確かに、時間があることがまずは解決のための必要条件になるだろう。だが、実際にそれだけで十分なのだろうか。仮に省察時間が十分に得られれば選択にゆとりが生まれ、自らの行為について考える余裕はできる。しかし、必ずしも、時間さえあれば自らを問い直し、キャラ造りが止むとも言えないだろう。仮に時間があったとしても、キャラ造りをする自分を見つめ直し、他の方法で意味づけをすることを考えなければ時間を持て余すだけである。つまり結局時間がただ単にあるだけでは、子ども達が現在に焦点化して刹那的に他者承認を求めることを止めるには十分ではないのだ。

そもそも子ども達が刹那的なのは、世間で言われているような、我慢が足りないとか、自己中心的だとか批判されるような、モラルの低下や公的意識の欠如からではない。個人化というマクロな変化に何とか対応していこうという苦肉の策の表れなのだ。ゆえに、ただ時間を与えるのではなく、その時間をいかに過ごすかを問題の焦点にすべきである。そこでこのような現状を打破すべく本論では『時間と自由』で独自の時間論を述べたH.ベルクソンの時間論を批判検討しながら、子ども達が有意義に時間を過ごしていく手立てを考察しいくこととする。

Ⅲ　H. ベルクソンの「時間論」

1.「持続」の概念

ここからは実際にベルクソンの時間論[11]についての理解を深めていくのだが、それに当たって最も注意すべきことがある。ベルクソンが述べていることは時間論と言いつつも実際は意識の時間的な流れなのであり、どちらかといえば自我の意識の変化だと言い表すことができるという点だ。彼によれば、人間が生きる本来の時間とは我々の内的意識の流れや変化と言われる持続であり、時計で計測されるような細切れにできる時間とは本質的には異なる。ベルクソンはその持続というものを次のように定義している。

> 純粋持続とは、質的変化の継起以外のものではありえないはずであり、それらの変化は、はっきりした輪郭をもたず、お互いに対して外在化する傾向ももたず、数とのあいだにいかなる血のつながりももたずに、融合し合い、浸透し合っている。それは純粋の異質性であろう。[12]

端的に言い表すならば、変化してゆく主観的意識のありようだと表現できるだろう。例えば、♪＝60の曲なら、その曲を空間に展開した時に、一つひとつの四分音符は時間的に切り分けられる。一つの音が聞こえた時に、前の音はすでに消えてしまっている。そして計測すれば、一分で60個の音が鳴ったことになるだろう。これが空間に展開され、外在化した時間である。ところが、我々は、現在の音に前の音を浸透させ、また現在の音の後に次の音を浸透させる。これによって音楽が我々に何らかの感情を引き起こすのだ。このように、ある音は別の音から截然と区別することはできずに融合している。これら決して外在化しない相互浸透こそが持続の特徴なのだ。

そして異質性とは、一人ひとり、瞬間ごとにその持続が異なることである。仮にパーツごとに分解してもそれぞれが比較不能な全体からなること、であると捉えられるだろう。例えばある悲しみの移り変わりとある怒りの移り変わりの様相を比べて、どちらがどれだけ数字上で変化しているかを明示することは不可能である。言語によって辛うじて自らの内的意識の変化を表現することは可能であるが、それも厳密には主観的な判断でしかなく、時計で測るような客観性を欠いているのである。

つまりベルクソンは、客観的な時間と持続を区別して、持続を時間と捉えるのだが、多くの人々は持続とそれを空間に変換したものとを混同して、時間を空間と同じ等質的な環境とみなしているという。しかしながら、持続を空間に変換した時点でその本来のニュアンスは喪失してしまっているのが現実である。よって本来の純粋な持続とは、言語によって表現できない個々人の主観的な意識の変化や流れなのである。

2. 時間と空間の関係

さて、続いて空間論についての理解を深めていこう。実際にベルクソンは空間論という章立てはしておらず、持続という独自の時間論を語る上での二項対立の相手として空間を記述している。例えば先ほども述べたように持続は主観的な意識の変化なのであるから、実際に生活する上では何かと不都合が生じる。なぜならば我々がそれぞれの持続を生きつつも、他者や社会とコミットするためには、持続を何らかの形で意識外の世界に伝えなければならないからだ。つまりいかに持続を生きていようと、我々は1人で生活している訳ではないのだから、この空間の問題を無視することはできない。そもそも空間内では、我々の主観的意識を客観化された状態に変換することが我々の関心の全てとなり[13]、そうすることで社会生活に順応している。さらにベルクソンは以下のように言う。

> われわれはたいていの場合、前者、すなわち等質的空間内に投影された自我の影に満足している。意識は、区別しようとする飽くことない願いにさいなまれて、現実に記号を置きかえ、あるいは記号を通してしか現実を知覚しない。このように屈折させられて、またまさにそのために細分されてしまった自我は、一般の社会生活や特に言語の要求には、はるかによく応ずるものとなるので、意識はこのような自我の方が好ましいと思いしだいに根本的自我を見うしなって行くのである。[14]

つまりベルクソンは、持続を空間的世界に置き換えること自体は否定していない。しかし、持続が根底にあることが忘れ去られ、むしろ、外的な時間こそが心理学的時間であると考えられることに異議をとなえているのだ。実際に社会生活の中では純粋持続を純粋なまま保持するのではなく、言語によって置き換えることが不可欠になる。そして公的な空間に変換された持続は人々の間で共通認識を獲得し、その認識に基づいて社会生活は営まれている。例えば心の中の落ち込んだ気持ちは「悲しみ」であるとか、盛り上がった気持ちは「喜び」であるとか、固定化されることによって人々は混乱することなく生活できているのだ。だがベルクソンが言うように、我々は知らぬ間に言語が置き換えた純粋ではない持続の記号や幻に取り付かれ、いつの間にか知覚される言語のイメージやニュアンスに影響されて自らの持続を構成してしまっているという懸念もある。つまり公的空間の中に身を置くことによって、ある落ち込んだ気持ちが「悲しみ」なんだと思い込まされることによって私的な純粋持続が本来の性質を失ってしまうのだ。例えばその感情は本来「悲しみ」ではなく「憂鬱」である可能性も保持していることもありえるのだが、それに近いニュアンスのイメージに自らを規定させられてしまうこともある。感情に限らず、前述した「キャラ」を用いたコミュニケーションなどのように、本意ではないことも時には行動してしまっていることもあるかもしれない。こうして我々の多くは空間に対してアジャストするように、外的に生き、根本的自我を見失っている状態に陥ってしまっている。ベルクソンによれば、これは望ましい状態ではなく、あくまで行動の主軸は持続にこそ置かれるべきであり、その上で空間と持続とのちょうど中間点に位置するような、内的持続の積み重ねである知識と、外的空間からの衝動に富んだ自我が形成されるべき[15]だとされている。

3. 自我の二つの相

ベルクソンは持続と空間との関係から、自我の構造についても言及している。ベルクソンによれば自我はその表面で外部世界と接しており、そこでは自我は空間に並置されたもの、つまり空間に翻訳されたものとして生活している。しかし、その表面を掘り進むと自我は本来の性質を取り戻し、客観化できないものになる。よってそのような自我内部では意識の諸状態は区別できず、溶け合って浸透しているのだ[16]。この二層構造をベルクソンは第一の自我を第二の自我が蔽っていると表現し[17]、第二の自我は互いに外在性を獲得しており、容易に言葉で表されるものだとしている。つまり第一の自我とは量的に表現できない純粋持続であり、第二の自我とは空間の中で数的多数性に変換された意識なのである。これは決して自我が二つに分断されている訳ではなく、第二の自我が第一の自我の表面を蔽って外界に接しているのであり、我々は常に純粋持続などの主観意識を外界に変換し、空間内で生活し

ていることがわかる。

ベルクソンの理論を手がかりに時間の過ごし方を考察してみれば、いかに自らの主観的な時間の中に行動の主軸を置きながら、外的空間との関係の中で、その自分の時間を表現していけるかだとまとめられる。つまり必要とされるのは、持続を空間に表現してゆく資質である。全ての行動が持続を通して行われることで、外的に生きている現状を打破することにつながるのだ。既述のとおり、ベルクソンは自我の構造を2つに分け、言語に変換できない純粋持続を第一の自我とし、言語に変換されている持続のことを第二の自我と定めているが、先ほど述べた持続と空間の中間点に位置しているのもが第二の自我であると考えられる。そしてこの第二の自我に当たる部分こそが、持続に行動の主軸を置きながらも、空間に持続を表現していくための資質であると考えられる。

4. ベルクソンの結論

ではこのような第二の自我に当たる部分を適切に表現できるようになるためにはどのようなことが必要なのだろうか。我々が外的に生きている現状を考えれば、それは何よりもまず持続に正直に生きることだと言えるだろう。持続を介して全ての行動を取っていくことが、外的に生きている状況を打破し、与えられた時間を有意義に過ごすことにつながると考えられる。ベルクソンは「自由に行動するとは、自己を取り戻すことであり、純粋持続の中にわが身を置き直すことである。」[18]と述べ、純粋持続に立ち返る重要性を示唆している。確かに持続を介して行動するようになれば、反射的行動をすることはあっても、外的に生きることは無い。つまり、瞬間的に行動することはあっても、それには全て意味があるということになる。（玉木博章）

Ⅳ　ベルクソンの時間論から導出される展望と課題

現代の反射的・刹那的状況に対応するために、ベルクソンが用意しうる結論は、「純粋持続の中に身を置き直す」[19]ということになるだろう。これにしたがえば、第一の自我が感じることを遮らないことが大切になる。これを教育の文脈で捉えるならば、たとえば、現在という時間と将来という時間を、外的な等質的時間に位置づけて直線的に結びつけようとするキャリア教育は自由でないとして退けられ、現在を充実して持続させることが本当の意味でのキャリア教育になるということが言えるかもしれない。つまり、無理矢理「夢」や「将来の希望」を持たせるのではなく、現在の興味などに従いつつ、それを文字通り持続的に発展させていく先に、キャリアは結果として形成されていくという構想だ。

しかし、はたしてどうすれば、純粋持続の中に身を置き直すことができるのだろうか。ベルクソンから読み取れるのは、あくまで第一の自我に浸る・沈潜するという、内省・内観によってということになるのではないだろうか。既述の通り、本論は、十分な時間があっても反射が内省に変化するとは限らないという問題意識から出発した。もちろん、ベルクソン流の内省がどういう状態を指すのかということは明確になったかもしれない。しかし、現実の教育の問題まで降りてきたときに、具体的に何をすればよいのかは不明のままだ。ここから、たとえば、純粋持続に身を置くということを、M. チクセントミハイが述べた「フロー体験」[20]のような状態と比較して、それとの相似性が見いだされるなら、フロー状態をつくるための方法から示唆を得ることができるかもしれない。また、「〈今ここ〉に佇む技法」について提案している、哲学者古東哲明のさまざまな技法を検討してみることもヒントになるかもしれない[21]。

いずれにしても、内省・内観を主とするということは、空間世界に抗っていく力が要求されるのであり、個々人の力量に還元されてしまうおそれがある。つまり、内省によって自我を強化できる者とできない者が生まれるのではないかということだ。そうであれば、それは教育では、強い自己を求める教育（たとえば、上で示唆した技法等による訓練）が推奨されるか、あるいは、教育の論理ではなく、個人間の差異についての説明科学に陥るかのいずれかであろう。

しかし、そもそも教育の課題としては、自我に沈潜できないのはなぜなのかを考えなければならないだろう。自我が反射的になってきたことには、第二近代になったことと関係している。つまり、純粋持続は人間である限り、いつの時代にも同様に現れるものではなく、それが維持されるかどうかは、結局のところ外的世界の変化に依存しているということになる。そうだとすれば、やはり、外的世界のありようを変革することなしに、自我の問題に矮小化するのは誤りではないかという疑念が生じる。

他方、純粋持続が外的条件に依存するだけでなく、その質料自体が、外部にあるということにも注目する必要がある。純粋持続に沈潜するということは、ある意味で外部からの影響を遮断することになるだろうが、音楽鑑賞においてメロディに浸るときにみられるように、メロディに浸ることは外部にある時間的に細切れにされた個々の音無しには不可能である。このように、持続は常にその資源を外部に持っていることになる。内側に沈潜するだけではなく、教育的課題としては、外部に開かれるという面も見落としてはならないのではないだろうか。

もちろん、ベルクソンは自我が強化されていくことについて「自我は、二つの相反する状態を経過するに

つれて、増大し、ゆたかになり、変化するものである」[22]と述べているが、二つの相反する状態を経過することが具体的に何をすることなのか、両者は同時性をもつのか、交互なのか、必ずしも明確ではない。さらに、この両者の中で外的質料は持続とどのような関係を経ていくのか十分に述べられていない。あくまでベルクソンの言う自我及び持続の強化とは、内的なアンビバレントな状態を経験することがきっかけとなっている。だが、そのアンビバレントな状態とは果たして内省だけで起こりうるものなのであろうか。むしろ、そのような状態をより引き起こさせるためにも、空間から、外部からのアプローチが必要になるのではなかろうか。つまり、純粋持続とは本来最初から我々の内側にあるものではなく、あったとしても、空間からの外的なアプローチがあってこそ強化され、第二の自我を通して表現されていくものなのではないだろうか。

確かにベルクソンは「この両極端の間には、現状の輪郭を正しく追うには十分すなおで、しかも他のすべての呼びかけに抵抗するには十分強力な、記憶力のめぐまれた素質が位している。良識、あるいは実際的な勘は、多分これにほかならないだろう。」[23]と、第二の自我に当たる部分の重要性を説いてはいるが、記憶と知覚、持続と空間の相互作用は元より、空間からのアプローチについてはあまり触れられていない。つまり、すべて持続を介して行動するというベルクソンの理論に依拠しつつも、ベルクソンにはその持続を強化するための空間的なアプローチという視点が弱いため、どうしても、ベルクソンが持続と呼ぶものを強化するためにこそ、空間的なものが必要になってくるのではないか。

このことを補いうるのは、たとえばJ. J. ギブソンの直接知覚論であろう。理論的枠組みからみると、ベルクソンは、物自体は経験不能とするカントを批判している[24]。これは、ちょうど、感覚を再構成して現実を組み立てるという間接知覚論の観念性を批判し、直接知覚論によって二元論を克服しようとしたJ. J. ギブソン[25]の理論と親和性がある。しかし、ベルクソンは、ギブソンの出自となっている精神物理学も批判している。持続も外的世界も認めるベルクソンの二元論は、やはり、つきつめて考えていくと、外的なものの重要性に行き着かざるを得ないのではないかと推察される。ゆえにベルクソンの時間論と、ギブソンの時間（変化･差異や恒常性）に関する考え方との比較検討が必要になってくるだろう。たとえば、ギブソン理論に当てはめたときに、音楽鑑賞がどのように理解されるのかという点などが検討に値するだろう。

なお、当初示したいくつかの課題に照らして、ベルクソンの理論にはなお次のような課題も残される。

第一に、ベルクソンの思考に依拠する限り、子どもたちがキャラを演じたり、空気を読んだりしていたとしても、意識されていないだけで持続は続いていることになる。ゆえに、ベルクソンに従えば、キャラを演じたり、空気を読んだりすることそのものが悪いと言うことにはならないだろう。問題となるのは、そのときの純粋持続とは何で、それが外的に展開されたものとは、それぞれ何を指すのかということを明らかにすることである。これを明らかにしなければ、「純粋持続に身を置き直す」はどういうことを指すのかがわからないだろう。すくなくとも外的に何に展開されているのかでも明らかになれば、そこから純粋持続へとさかのぼることは可能なように思われる。もちろん、それは、異なるキャラ相互の根底に共通する持続があると仮定しての話である。

ただし、このような分析は、純粋持続はそれ自体ではなくて、あとから振り返られた「対象としての純粋持続」であることに注意が必要だろう。要するに、純粋持続とは個人があることに没入しつづけていることを指しており、反省的に純粋持続を確認することは、すでに純粋持続ではなくなってしまっているということだ。

第二に、刹那とは、その場・その時しのぎを表すことになるから、Ａという刹那とＢという刹那は分割可能であるということになるとしよう。その場合、各刹那は相互に分割可能であるのであるから、外的に展開された時間ということになる。しかし、「第二近代」論が明らかにしたのは、個人が依拠すべき空間や人間関係が不確実なものとなって揺らいでいるということではなかっただろうか。そうであるなら、等質的な環境そのものが消失しているということにならないだろうか。ある刹那と別の刹那を外的な等質的なもののなかに位置づけられないとしたら、それらは、物理的時間として位置づけることもできない。このことからわかるように、刹那は分割可能でありつつ、なおかつ、それらを外的な時間として位置づけることも困難であるということになる。ここから、現代人は、二重の意味で自我や時間から疎外されているといえるのではないか。第一に、純粋持続という意識のレベルへの内省が困難な点において、第二に、外的空間に展開しようとしても外的空間そのものの等質性・一貫性が不確実になっているという点において。このような現状に対して、ベルクソンならどう説明するのかということについての解明が必要だ。

そこからさらに、次のような疑問が生じてくる。そのような社会では、つねにその場・そのときを生きているという意味で外的なモノサシが不在なのだとすれば、それは純粋持続とどこが異なるのかという問題である。仮に、それらが相互に浸透し合わないとすれば、ミクロなレベルの純粋持続が、相互に無関係に、生成消滅しているといえるかもしれないし、複数の純粋持続が、点滅しながら継続しているのかともいえるかも

しれない。生成消滅しているとすれば、なぜ短い持続が生成消滅するようになったのかという点に立ち戻る必要があり、その場合、Z. バウマンの、人生で一つの墓が立つのではなく、いくつもの墓が立つといった表現[26]に見られるように再び第二近代論におけるアイデンティティ論との対話が必要になるだろう。また、複数の純粋自我が並行して存在するのだとしたら、多重人格化と言われたり、作家の平野啓一郎が最近追求している「分人」というテーマ[27]などについての検討が必要となるだろう。（藤井啓之）

註

1　香山リカは、ネオリアリズムを現代の若者の特徴とし、「非常に狭量にして刹那的な損得主義」「自分にかかわりのある身近な問題への関心のみにもとづく実用主義」と定義している。『〈私〉の愛国心』ちくま新書、2004年、p.56。

2　子どもたちの繊細な関係についての指摘は、古くはたとえば中西新太郎『子どもたちのサブカルチャー大研究』旬報社、1997年などを参照のこと。

3　この説に関しては様々な識者（例えばZ. バウマンやA. ギデンズなど）がそれぞれの表現で述べているが、凡そ一致するところがある。

4　U. ベック「政治の再創造―再帰的近代化理論に向けて―」U. ベック、A. ギデンズ、S. ラッシュ、松尾精文、小幡正敏、叶堂隆三訳『再帰的近代―近現代の社会秩序における政治、伝統、美的原理―』而立書房、1997年、30頁参照。

5　たとえばキリスト教徒である私、代々大工の家に育った僕といった具合に予め決められている自分とは別の存在に依拠することで自分を成り立たせていたのだが、近代化することで徐々に既存の共同体は消失し、職業なや生き方など様々なものを個人が選択しなければならない世界が生まれる。

6　たとえば、土井隆義『友だち地獄－「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房、2008年、134頁では近年の子ども達の「見られていないかもしれない」不安を指摘し、他者からのまなざしを浴びることで自らの存在を確認している様子について述べている。

7　S. ラッシュは個人化したすぐの社会を第一近代、個人化が過度になった社会を第二近代と称している。詳しくはS. ラッシュ「再帰性とその分身―構造、美的原理、共同体―」U. ベック、A. ギデンズ、S. ラッシュ、松尾精文、小幡正敏、叶堂隆三訳『再帰的近代―近現代の社会秩序における政治、伝統、美的原理―』而立書房、1997年や、S. Lash "*Individualization in Non-Linear Mode*" U. Beck "*Individualization*" Foreword、SAGE Publications 2001年等を参照のこと。

8　See S. Lash "*Individualization in Non-Linear Mode*" U. Beck "*Individualization*" Foreword p. 8, SAGE Publications 2001

9　たとえば、本田由紀『学校の空気』岩波書店、2011年、55頁では、中学二年生を対象に行った「クラス内で自分の気持ちと違っていても人が求めるキャラを演じてしまうことがある」という調査で数以上がキャラを造って人間関係を維持している層があり、しかもそのキャラには納得していないという実体が浮き彫りになった。とてもあてはまる、まあまああてはまる、あまりあてはまらない、まったくあてはまらない、の4つの選択肢に対して、男子は33.1％、女子は35.9％が、あてはまる方である2つの選択肢を選んでいる。さらにその内訳を階層別（クラス内での人気を高位、中位、低位の階層3段階に分け、「いじられキャラ」をプラスした4段階）で分析すると男子では高位で37.3、中位で22.6％、低位で44.2％、いじられ層で69％が当てはまるを選んでいる。一方女子では高位で31.8％、中位で30.4％、低位で51.9％、いじられ層で47％となっている。

10　S. Lash、前掲書　p.8参照

11　ベルクソンの時間論や空間論に関してはH. ベルクソン著、平井啓之訳『時間と自由』白水社、1990年や、H. ベルクソン著、田島節夫訳「物質と記憶」、『ベルグソン全集第二巻』白水社、1965年を参照している。

12　H. ベルクソン著、平井啓之訳『時間と自由』白水社、1990年、109頁。

13　同上書76～77頁参照。

14　同上書132頁。

15　H. ベルクソン著、田島節夫訳「物質と記憶」、『ベルグソン全集第二巻』白水社、1965年、173頁参照。

16　H. ベルクソン著、平井啓之訳、『時間と自由』白水社、1990年、168頁参照。

17　同上書142頁参照。

18　同上書236頁。

19　同上書237～238頁。

20　チクセントミハイは、最適経験において「時間が普通とは異なる早さで進むということである。夜とか昼というような、自分の外側のことがらについて我々が測る客観的で形式的な持続時間、つまり通常の時計の進行は、その活動によって指示されるリズムによって異なる者に変換される。」と述べている。M. チクセントミハイ『フロー体験　喜びの現象学』世界思想社、1996年。

21 古東哲明『瞬間を生きる哲学』筑摩書房、2011年。ここで古東氏は、たとえば、つねるとか、超スローで歩くとか、呼吸法とかの8つの技法を示している。

22　同上書180頁

23　H. ベルクソン著、田島節夫訳「物質と記憶」、『ベルグソン全集第二巻』白水社、1965年、173頁。

24　H. ベルクソン著、平井啓之訳『時間と自由』白水社、1990年、236～244頁参照。

25　J. J. ギブソン『生態学的知覚システム』東京大学出版会、2011年等参照。

26　Z. バウマン『廃棄された生―モダニティとその追放者』昭和堂、2007年。

27　平野の「分人」に関する関心は、すでに『最後の変身』（『滴り落ちる時計たちの波紋』文春文庫、2007年所収）にその萌芽が見られるが、その後『ドーン』（講談社、2009年）『かたちだけの愛』（中央公論社、2010年）でも、継続的に追究されている。これに関する分析は別の機会に譲りたい。

（2011年9月16日受理）